

良寛さんは、書をはじめ、たくさんの魅力を持つ、ますます人気の人ですが、お客様には、まずは良寛が越後の民衆とともに生きた人と説明したいと思います。

1. 良寛さんとは、どういう人か

- (1) 多くの見方があるが、全て良寛です
- (2) 長岡市内、周辺市町村には、多くの銅像、歌碑、書碑
- (3) 良寛年譜と概略年代
- (4) 良寛と相馬御鳳、安田靱彦 関連年譜
- (5) 堀口大學と心月輪

2. 修行僧 良寛の姿

- (1) 良寛、親鸞の愚
- (2) 立松和平 良寛 行に生き行に死す

3. 五合庵(燕市) 禅僧・良寛の心に触れる

2017/3/18付日本経済新聞の記事

4. ことば 「仏説無量寿経」の中の「愛語」と、道元の「愛語」

- (1) 親鸞、道元の菩薩の行の根本
- (2) 沙門良寛謹書の道元「愛語」
- (3) 愛語のほか、四摂法 「布施・愛語・利行・同事」
- (4) 「仏説無量寿経」のなかの、和顔愛語、先意承聞、小欲知足
- (5) 夢違観音の和顔、聖徳太子の「和を以て貴しとなす」

5. 多くの和歌、漢詩

いくつかの、お薦めコース ～与板の良寛詩歌碑公園「いしぶみの里」ほか
和歌、漢詩

6. 良寛と貞心尼

- (1) 良寛さんの恋
- (2) 良寛の最期の句
- (3) 木村家草庵とは
- (4) 貞心尼の歌

7. ハナの笑った日

～ 洪水の惨禍にたびたび襲われた、当時の越後の哀しい現実

8. 隆泉寺と西楽寺

- (1) 隆泉寺と木村家
- (2) 木村家の良寛の墓石
- (3) 西楽寺、西楽寺と良寛の縁
- (4) 西楽寺本堂前にある良寛旋頭歌碑

9. 良寛の法統

- (1) 遍澄とは、どんな人か
- (2) 良寛の法統系図
- (3) 良寛の法弟と念仏

- ・補足 漢詩、斜生涯懶立身
 (漢詩1) 寛政甲子夏、(漢詩3) 僧伽 の全文
 (漢詩2) 良寛のお墓の「僧伽」選定の見方について

 (漢詩3) 僧伽 現代語訳
- ・補足 良寛と鈴木文臺・漢学塾長善館の関わりのトピックス

「ガイドからのメッセージ」には、本稿のMfG_J_T12-7_Ryoukan.pdf
 (良寛禅師) のほかに、下記があります。

MfG_J_How_should_we_explain_Sho_by_Ryoukan.pdf
 (良寛の書を如何に説明するか)

MfG_J_Ryoukan_and_art.pdf
 (良寛とアート)

MfG_E_How_should_we_explain_Sho_by_Ryoukan.pdf
 (日本語版と独立した、良寛の書の紹介)

MfG_J_Ryoukan_Flood_and_Sanjoh_Earthquake.pdf
 (良寛と災害、「災難に逢う時節には」について)

1. 良寛さんとは、どういう人か

良寛さんは、江戸後期の僧侶、出雲崎に生まれ、二十年ほどの備前の修行時代以外の人生の殆どを、出雲崎、国上山を含む分水、寺泊、和島に住み、多くの和歌、漢詩、書を遺した人です。

出雲崎、分水、和島に史料館・記念館があり、中越を中心に多くの銅像を見ることができ、これらを含め多くの史跡に、今も全国からファンが訪れています。観光ボランティアのゲストにも、良寛さんのファンも多いのでは、と思います。そこで、話題をいくつか、まとめてみました。

(1) 多くの見方があるが、全て良寛です

1) きびしい禅僧 strict Zen priest

当時の仏教徒への痛烈な批判 ～ 墓石に刻まれた、僧伽の文

2) 孤立した僧

生涯、自坊を持たなかった ～ 漢詩 生涯懶立身

He did not have his own temple during his about 70 years lifespan

3) 民衆と共に生きた僧

村人、各地有力者・支援者との交流録から見えるもの

寛政甲子夏、災難に逢う時節には災難に逢うがよく候

厳しい未来が待ち受ける子供らへの、慈しみ、限りない愛情

He wanted to have his life with peoples, local farmers and marchants and their poor children with deep love of compassion.

4) 漢詩、万葉仮名詩の名手であり、書の名手

近年、名品の大半は京都に行き、県内に残る書は激減したという人も。

5) 貞心尼との恋

簡単に恋といってよいか、わかりませんが

6) 人材発掘

多くの人に影響を与え、越後に多種多様な文化を華咲かせたと思いますが、私が思う、大きな功績のひとつに、長善館創始者・鈴木文臺を、その幼児期に見出したことがあります。もし長善館なかりせば、その後の越後は、どうなったか。長岡中学の基礎を作った虎三郎、億次郎に匹敵する功績だと、思っています。



・五合庵と解良家

1814年頃、村上藩の庄屋を務めていた分水の解良家で、後に長善館を開塾することになる鈴木文臺が、良寛の才を見出す。（良寛18歳）

良寛が玉島(岡山県倉敷市)の円通寺できびしい修行を終えさらに各地の名僧をまづねて研さんを重ねたのち寛政8年(1796)頃から山麓の乙子神社わきの草庵に移り住む迄の約20年間 住いしたところである

五合庵の名は 貞享(1684～)の頃、国上寺に身を寄せ、時の住職を助けて国上寺の阿弥陀堂(本堂)等の再建に身命をかけた万元上人に、この草庵と毎日米5合を給したことから名づけたといわれている。

解良家十代の叔問は良寛より7歳年下で、分水町牧が花というところにいた。最大の理解者の一人。解良叔問は、越後線粟生津駅の西500m、長善館の北西に200～300mの位置で、現在も広いお屋敷と百樹園という庭がある。

鈴木家と解良家は、深い付き合いがあったと思われる。

良寛の五合庵から一里ほどのところにあり、解良家を頻繁に訪れたという。

分水の解良家を訪れては数日滞在したり、共に歌を詠んだり書を書いたり、良い時間を過ごしていたようです。それ故、解良家には良寛さまの書の作品や書簡、逸話が多く残されている。ひびの入った丸い鍋蓋を見て、それを拾って書かれた「心月輪」(しんがちりん)も、解良家での作です。良寛研究家としても知られる書家の新潟大学名誉教授の加藤僖一先生は、その著書のなかで「心月輪」とは、真言宗の中心的思想である月輪観のことで、両界曼荼羅の金剛界を「心月輪」といい、ひびの入った丸い鍋蓋を見た良寛が、咄嗟に月輪を連想したのでは、と述べています。

(2) 良寛の銅像

長岡周辺には、多くの良寛像、歌碑、書碑があります。

近隣の三つの良寛の資料館、史料館のほか、随所に見ることができます。

右は寺泊の密蔵院の脇にある、日本海を背に立つ石像です。

長岡市以外にもあり、下図は、新潟市の西大畑公園にある、大きなフロンズの「良寛さん、あそぼ」像で、峰村哲也さん作、新潟良寛会の寄贈によるものです。



(3) 良寛年譜 「良寛の清貧の生き方と慈愛の心」、全国良寛会発行(2019)
 及び 考古堂 <http://www.kokodo.co.jp/ryokankai/shoukai.htm>を
 を参考にし、それらに、いくつかを追記しました。)

西暦	年齢	事項
1758年	1	出雲崎の名主・橘屋山本家の長男として誕生。幼名栄蔵。
1770年	13	地蔵堂(現・燕市分水)の大森子陽の塾「三峰館」に入門。
1772年	15	元服。翌年の説もある。文孝と名乗った。
1775年	17	子陽の塾「三峰館」を辞し、名主見習役となる。 この年に結婚し、半年後に離婚という説もある。
1775年	18	7月18日、尼瀬の光照寺の玄乗破了に従い剃髪する。
1778年	21	弟由之、17歳で名主役になり、新左衛門と称する。
1779年	22	5月ごろ光照寺で旅の国仙和尚より得度。共に備中玉島の
1783年	26	母のぶ死去(享年49) 円通寺に赴く。
1784年	27	諸国行脚。
1785年	28	4月、亡母三回忌に一時帰郷。
1786年	29	父以南、隠居し、由之が25歳で山本家を相続する。
1790年	33	師国仙和尚が良寛に印可の偈を与える。
1791年	34	国仙和尚遷化。四国、東北行脚との説あり。
1796年	39	前年に父以南が死去し帰国。郷本(和島へ2kmの海岸)の
1797年	40	国上山の五合庵に定住する。 空庵に仮住まいか。
1800年	43	離婚の妻歿。
1802年	45	寺泊の照明寺密蔵院や牧ヶ花の観照寺に仮住まい。
1805年	48	五合庵に定住する。
1808年	51	法友有願死去(享年71)。
1811年	54	弟由之が不手際のため隠居し、馬之助家を継ぐ。
1814年	57	鈴木文臺を「斯の児、異日必ず大器を成すべし」とほめたたえた。
1815年	58	遍澄が弟子となる。
1816年	59	乙子神社草庵に移住。
1819年	62	最大の理解者の一人、解良叔問死去。(良寛より7歳年下) 長岡藩主の忠精、五合庵に良寛を訪ねる
1826年	69	島崎の木村家内草庵に移る。由之、与板に松下庵を結ぶ。
1827年	70	夏、寺泊の密蔵院に仮住。秋に貞心尼と初相見。
1828年	71	11月12日、三条大地震。 貞心尼(1798 - 1872年)
1830年	73	7月ころから病気。12月下旬に危篤状態に。
1831年	74	正月6日、申の刻、良寛遷化。8日葬式。
1833年		良寛三回忌に良寛墓碑を建立。
1835年		貞心尼の歌集「はちすの露」完成。 1872 貞心尼歿。 1876 遍澄歿。

・概略年代

- (1758) 生誕 から22歳まで 出雲崎
- (1779) 22歳から34歳 備中玉島円通寺時代
- (1791) 34歳から47歳頃 不定住時代
- (1805) 48歳から59歳頃 五合庵時代
- (1816) 59歳から69歳頃 乙子神社草庵時代
- (1826) 69歳の暮れから74歳 の正月歿まで 木村家草庵時代

(4) 良寛と相馬御鳳、安田靱彦 関連年譜

良寛略年譜

- 1758年(宝暦8) 出雲崎の橘崖山本家の長男として生まれる
- 1779年(安永8) 国仙和削に随行して、岡山県円通寺に赴く
- 1805年(文化2) 国上山の五合庵に定住する
- 1826年(文政9) 島崎の能登屋木材家邸内の庵に移住
- 1831年(天保2) 正月六日島崎にて遷化する

相馬御鳳略年譜

- 1883年(明治16) 糸魚川の相馬家の長男として生まれる
- 1916年(大正5) 東京から糸魚川に帰郷。良寛研究を始める
- 1918年(大正7)『大愚良寛』を出版する
- 1935年(昭和10)『良寛首考』を出版する
- 1950年(昭和25)5月糸魚川にて永眠する

安田靱彦略年譜

- 1899年(明治31) 小堀鞆音に師事
- 1922年(大正11) 設計した良寛堂が完成
- 1948年(昭和23) 文化勲章を受章する
- 1965年(昭和40) 東京芸術大学名誉教授
- 1978年(昭和53)4月大磯にて永眠する

木村家の敷地内にかつて良寛が住んでいた小庵の跡には「良寛禅師の庵室跡」の石碑が建っている。

碑は安田靱彦によって書かれたもの。

(5) 堀口大學と心月輪

「堀口大學が、かなりの良寛ファン」というトピックスです。
手元に、堀口大學と良寛に関する、ネット検索のメモがありました。
出典をメモし忘れて出所が不明ですが、掲載します。

「良寛さま／古ゝろはまどか／月の輪と／姿は淡し／けむりかと／大學」と
読める。

「「篤学の良寛研究家東郷豊治氏と良寛和尚の遺品拝観の旅中、
昭和二十三年九月十六日、新潟県西蒲原郡国上村牧ヶ花解良家にて
心月輪の鍋蓋を見て作られた。
好んで色紙などに書かれる。詩集未出。」

その後の、堀口大學晩年の詩集、堀口[1978]、
すなわち『詩集 消えがての虹』には、
「良寛さま／／こころはまどか／月の輪と／／すがたは淡し／けむりかと／／
(昭和二十三年の旧作)」という形で収録された。

この詩からすると、堀口大學は、かなりの良寛ファンであるように見える。

堀口大學は、熱狂的な良寛マニアであるにもかかわらず、ほとんど良寛に
ついての文章を残していないということである。伊丹末雄氏によれば、
それこそが、堀口大學の「良寛好き」が、真正のものであることの証であるとの
ことである。

2. 修行僧 良寛の姿

(1) 良寛、親鸞の愚

～ 大愚良寛 愚禿親鸞

<http://kidukikankyo.blog68.fc2.com/blog-entry-848.html> ほかを参照しました。

<p>大愚良寛 良寛は俗名、号は大愚 「愚かなる身こそなかなかうれしけれ 弥陀の誓ひにあふとおもへば」 …良寛禅師</p>	<p>愚禿親鸞 愚禿(ぐとく)は親鸞聖人が35歳の 時に、越後流罪を契機に自身を そのように呼称されたと いられています。</p>
---	---

それぞれ愚の字がついています。ご自分でおつけになった字であるに
違いありません。なぜそう名乗られたのか。

仏教の表現でいえば「いい人でない自分」を自覚なされたからということに
なりますが、別な視点でいえば「ありのまま生きさせてもらう」という宣言とも
受け取れます。

<p>良寛 「大愚のすすめ」</p>	<p>無我であってこそ、真に相手の立場になって考えること ができる。大愚であってこそ、苦が苦でなくなる。 そして大愚であり無我であれば、本当のまごころ、 すなわち「至誠」から行動できるのである。</p>
------------------------	---

良寛さんの「起き上がり小法師(こぼし)」と題する短い漢詩がある。
これは玩具のダルマのことである。

人の投げるにまかせ、人の笑うにまかす
さらに一物の心地に当たる無し
語を寄す、人生もし君に似たらば
よく世間に遊ぶに何事か有らん

玩具のダルマは人に投げられても投げられたまんま、
笑われても笑われたまんまで、それに対して何らの感情や妄想を起さない。
もし我々人間も君のような生き方ができるならば、人生を暮らすのに
何の苦労もないであろうに。自ら「大愚良寛」と称した良寛さんは、
人生を安楽に暮らす極意をこのように説いている。

親鸞	「愚禿(ぐとく)が心(しん)は
「愚禿親鸞」	内(ない)は愚(ぐ)にして外(げ)は賢(けん)なり」
	…親鸞聖人

愚禿と名のる私の心は、その内側には愚かさをもちながら、外見には賢く振る舞って生きていこうとしている

親鸞聖人は自らを煩惱だらけの愚かな凡夫として「愚禿釈親鸞」と名乗りました。

『教行信証』の末尾に「禿(とく)の字を用いて姓とした」と述べてられています。

愚禿というのは、禿は外見は僧の姿であっても、心と行いにおいては俗人と少しも変わらない、あさましい人間であるということを示しています。

その上にさらに「愚」の字をそえられたところに深く自己をみつめられた内省の厳しさがあらわれています。

親鸞聖人が83歳の時に書かれた『愚禿鈔(ぐとくしょう)』には「賢者(けんじゃ)の信(しん)を聞(き)きて、愚(ぐ)禿(とく)が心(しん)を顕(あらわ)す。

賢者(けんじゃ)の信(しん)は、内(うち)は賢(けん)にして外(ほか)は愚(ぐ)なり。

愚(ぐ)禿(とく)が心(しん)は、内(うち)は愚(ぐ)にして外(ほか)は賢(けん)なり」と書かれています。

これは限りない如来の光に照らされてあきらかになった自分自身の愚かさを告白されたものです。

それは同時に真実のみ教えにであって、如来の慈悲に救われる身であったことを心から喜ぶ感謝の表明でもあるのです。

(2) 立松和平 良寛 行に生き行に死す

(春秋社2010)を参考にしました。

三十四歳(寛政三年／一七九一) ～

天明八(一七八八)年八月十五日、良寛は国仙和尚より『正法眼蔵』の提唱を受け、さとの境地に達した。良寛という自由自在な生き方が、ここから開かれたのである。

この間、母・秀子が故郷で亡くなっている。良寛二十六歳の時である。良寛は国仙和尚の東国巡錫についていき、故郷で母の三回忌追善供養に加わったとも、帰郷はしなかったのだともいわれているが、その消息は定かではない。

寛政二(一七九〇)年冬、良寛三十三歳の時、国仙和尚は雲水修行が成就したという証明、すなわち印可を与える。良寛は師僧より偈文(げぶん)を授けたのである。

附良寛庵主(良寛庵主に附す)の偈文

良寛は大愚というとおり、愚人のごとく本来の精神をつつみ隠しているが、道を修め心を練り、愚の偉大さは誰もおよばない。生き方になんら技巧を弄さず、自然にまかせて真髓を会得している。これを知るのは私のみだ。よって私は山形の藤の木の杖を与える。この杖は私の分身として、居間にあっても午睡の時もいつもよき伴侶となるように。

偈文の大意はこのようである。良寛は師を心から慕い、師から与えられた印可の偈を終生手離さなかった。玉島円通寺の修行は十一年間であった。

良寛に印可を授けて間もなくの寛政三(一七九一)年三月、大忍国仙和尚は六十九歳で示寂した。良寛は円通寺において歴代住持和尚の庵室覺樹庵を与えられ、生活科として正銀五貫七百二十匁の土地が与えられ、また外護者(げごしや)によっても田畑が買い入れられていた。

しかし、良寛はそのようなものにとらわれることなく、諸国の名知識を訪ねて行脚をする。この間の消息はきわめて少なく、詳細はわかっていない。ある時には京都大徳寺の宗竜禅師を訪ね、ある時には土佐にあったとされている。

～ 当時の曹洞宗の道場の中で、厳しいことで知られた寺で印可、しかも格別の待遇を用意されたということから、高僧の域に達していたのは間違いない。吉本隆明さんの著書によれば、実際には、庵室の新住職が決まったのを受け、去ったようである。

～ 師の国仙和尚の黄檗禅と、臨済宗、曹洞宗との競い合うなかで、師の死去直後、曹洞宗の宗派から破門・追放されたという話もある。

良寛の父、以南は、妻とともに養子であったが、出雲崎ではしくじりつづきであった。惣領息子栄蔵の出家もそのひとつである。栄蔵が出家して七年目、家業を継いだ由之が二十五歳になったのを機に、五十一歳の以南はすべてを由之に譲ると、直江津、高田の方面に雲を友として旅に出る。その父が京都の桂川で身を投げて自殺したという知らせを、良寛は行脚のどこかの空の下で受ける悲しい体験をする。

3. 五合庵(燕市) 禅僧・良寛の心に触れる

2017/3/18付日本経済新聞の記事

2017/3/18付日本経済新聞

上越新幹線の燕三条駅から車で約30分。国上山の中腹にある国上寺の敷地に「五合庵(あん)」という、小さいおりがある。ここに江戸時代の禅僧で歌人の良寛が暮らしていた。

6畳一間ほどの板敷きで、わらぶき屋根の簡素な造りからは良寛のつましい暮らしがしのばれる。富や権力とは一線を画し、自然や子供との時間を大切にしたい人柄を慕い、多くの人を訪れる。

五合庵は各地で厳しい修行を積んだ後、越後に帰った良寛が約20年間過ごした地とされる。その名は国上寺の客僧、萬元上人が毎日5合の米を支給されていたのに由来する。現在のいおりは1914年に再建された。良寛はこの地で座禅や托鉢(たくはつ)をし、多くの詩や歌を生み出した。

「焚くほどは 風が持て来る 落葉かな」。良寛が長岡藩主から城下に大きな寺を建てて迎えられるとの申し入れを断ったときに詠んだ歌だ。火を燃やすのに必要な落ち葉は風が持ってきて、煮炊きに必要なのは自然が運んでくるという意味。自然体で生きる良寛の思想を表している。

国上寺住職の山田光哲さんによると、良寛が一躍有名になったのは小説「雪国」の作者、川端康成がノーベル文学賞の受賞講演で「日本人の心は越後の四季と良寛の書にある」と言及したのが大きい。「物にあふれた現代社会で本当の幸せとはなにか考えるヒントになる」と山田さんは話す。

「良寛の人生観は禅を極めてたどり着いた境地」と山田さん。あえて風雪が激しい日にいおりを訪ね、「彼が向き合った過酷な環境に思いをはせてみては」と勧める。一方、晴れた日にうっそうと生い茂る木々から漏れる光がいおりを照らし出す光景も幻想的だ。

訪問客が書き残すノートをめくってみた。「五合庵の縁側に座って妻とひなたぼっこを楽しみました。屋根から雪が落ちて溶ける音、遠くで鳥の声が聞こえます。良寛さま、いつもありがとうございます」とあった。

▽所在地＝新潟県燕市国上地内

▽入場料＝無料

▽電話＝0256・97・3758

4. ことば 道元の「愛語」と「仏説無量寿経」の中の「愛語」

道元と親鸞は、たびたび自力と他力の典型として、対比される。簡単に論ずることはできない問いであるが、目指す究極は同じと捉える人も多い。良寛には、道元の『正法眼蔵』の中の「愛語」も、親鸞の説いた「仏説無量寿経」の中の「和顔愛語、先意承聞、小欲知足」があるように思う。以下に掲げた「愛語」、和顔愛語、先意承聞、小欲知足のころは、良寛の要所であり、人間社会のなかで、人として生きるうえで大切なことを良寛さんは身をもって示したと感じています。

(1) 親鸞、道元の菩薩の行の根本

他力、自力の別はなく、
最後は仏様の力である。

言葉は違っても
底辺は同じではないか。

どう仏典を訳すか、
どう仏典を読むか、
西域語の仏典、漢訳仏典
を直接読む中、多くの
解釈や言葉の言い換え、
造語がなされてきた。

言葉こそ違え、底辺に

流れるものが同じように感じる一因として、このような、翻訳僧や各開祖らの苦労の中での言語翻訳・解釈の違いによるものがあると思います。

近年、漢文の読み下し文の評価が盛んになっています。

簡単に言うと、中国語の文法は語順が最優先で、日本語の助詞に相当する補足の手段が日本語ほど必須ではないようで、さまざまな解釈の介入する余地が少なくないのです。

親鸞も、その主著の「教行信証」、もちろん漢文ですが、その原本に、「このように読み取ってほしい」という意図なのかもしれませんが、いわゆる返り点や読みガナを竹の筆記道具で無色のマーキングを残しています。

「教行信証」のような、大著で詳細な説明を施している文章の中では、補足したり、言い換えたりしながら説明しているのかもしれませんが、それでも、誤読の可能性が残っていたのでしょう。その原因は、最初のインドでも、西域、中国でも、そして日本でも、共通の基盤の上に立って、基礎的な概念、使用する言葉の定義が明確にされず、むしろ相手により説明を工夫する、人を見て法を説くことが推奨されたためと納得しています。

菩薩の行としての四摂法 (三十二相経、等誦経)		法蔵菩薩の行 (無量寿経)
道元 正法眼蔵		親鸞 教行信証
愛語	利行	和顔愛語
同事		先意承問
布施		小欲知足
(利行)		志願無倦
自力		他力
他力も自力も、根は共通		

(2) 沙門良寛謹書の道元「愛語」

備中玉島の円通寺で国仙和尚より得度を受けた良寛は、この国仙和尚の仏法を護り、さらにその開祖の道元禅師を師と仰いでいました。

その道元の『正法眼蔵』の中の「愛語」を良寛が書き写したのが、「沙門良寛謹書」です。書き下し文を引用<http://www1.cncm.ne.jp/~seifu/aigo.htm>

愛語というは衆生をみるに、まず慈愛の心をおこし、
 顧愛の言語を施すなり　およそ暴悪の言語無きなり
 世俗には安否を問う礼儀あり　仏道には珍重の言葉あり　不審の孝行あり
 慈念衆生衆猶如赤子の才も、日をたくわえて、言語するは愛語なり
 徳あるは褒むべし、徳なきは憐れむべし
 愛語を好むよりは、ようやく愛語を増長するなり
 然(シカ)あれば日頃知られず、見えざる愛語も現前するなり
 現在の身命の存する間、好んで愛語すべし
 世に生にも不退転ならん
 怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を本とするなり
 向かいて愛語を聞くは、表を喜ばしめ、心を楽しくす
 向かわずして愛語を聞くは、肝に銘じ魂に銘ず
 知るべし愛語は愛心より起こる　愛心は慈心を種子とせり
 愛語より廻天の力あることを学すべきなり
 ただ能(ばさ一婆裟)を賞するのみにあらず　沙門良寛謹書

(3) 愛語のほか、四摂法「布施・愛語・利行・同事」

四つの(他の人を摂ける(助ける・救う)実践徳目であり、菩薩になるための行である。人々を救うための四つの智慧(般若)とされる。

「菩提薩四摂法(ぼだいさったししょうぼう)」は、道元禅師の著された正法眼蔵の中にあり、正法眼蔵の内容の殆どが修行僧に向けられものであるのに対し、この「菩提薩四摂法」は一般の信者のために書かれているものだと考えられている。

「布施」

幸せを一人占めせず、精神的にも物質的にも広くあまねく施し、与え与えられていることを感謝して生きること

「愛語」

どんな人に対しても、その人の事を第一に考え、その人のためになる言葉をかける。

「利行」。

見返りをもとめない利他の行いであり、自分のことは勘定に入れず、他の幸福のためによき手だてを廻らすことです。

「同事」。

自分を捨てて相手と同じ心・境遇になって、仏心を働かせることです。相手のことを思い、相手と同じ立場に身をおき、行動を共にすること。

(4) 「仏説無量寿経」のなかの、和顔愛語、先意承聞、小欲知足

お浄土は、彼岸、阿弥陀仏の西方極楽浄土にあるものではなく、此岸、現世にあり、それを知り、この世で生き切るすが、お経に説かれている、と受け取るべきなのかも知れません。

和顔愛語、先意承聞、小欲知足は、『仏説無量寿経』の中にある言葉で、後に阿弥陀仏となる法蔵菩薩が修行時代に積まれた菩薩行のひとつとして、説かれているなかに、ある言葉です。

それぞれ、わけんあいご、せんいじょうもん、しょうよくちそく、と読みます。

これを含む文は、「少欲知足にして染・意・痴なし。三昧常寂にして智慧無擬なり。

虚偽謡曲の心あることなし。和顔愛語にして、意を先にして承聞す。

勇猛精進にして志願倦むことなし。」

「和顔愛語」は、「和顔悦色施」と「言辞施」をあわせ、人々に幸せを施す布施の行で、和顔悦色施とは、やさしい微笑みを湛えた笑顔で、人に接することをいいます。言辞施とは、やさしい言葉をかけるように努めること。心からの優しい言葉は、どんなに相手を喜ばせるか計り知れないものがあります。

「先意承聞」は、相手の気持ちに寄り添い、相手を思いやる、相手の心を承る心です。また、「小欲知足」は、欲を少なくして足りることを知る、今生きているだけで十分に価値がある、今が幸せだと感じられなければ永遠に幸せは来ないよ、という心です。

私は、良寛の言葉、詩には、これらの心が滔滔と流れているように感じます。

和顔愛語 Make calm and charming face with quiet and warm words.

先意承聞 Give consideration to feeling of partners and care them.

Snuggle up to a feeling of partners and care them.

小欲知足 If you don't want too much, you can feel comfortable in your life.

(5) 夢違観音の和顔、聖徳太子の「和を以て貴しとなす」

法隆寺・夢違観音の和顔は、聖徳太子の「和を以て貴しとなす」、さらに無量寿経や良寛さんの「和顔愛語」に通じているような気がして、好きです。このお像を拝めば、悪い夢を良い夢に変えてくださる、という信仰は、きっと厳しい時代の、人々の切なる願いだったのでしょう。でも反対に、この今の

「夢のような幸せ」がいつまでも続きますようにという祈りも、あっていいし、そのように受け止めて下さっているようにも思えます。

仏教では「和」を大事にします。美術館に一時的に安置される仏像も、それぞれのもとのお寺で、何百年もの間、無数の人々の祈りを受け止めてきたことを想うと、自然と合掌したい気持ちになります。

「和」を大切にしたいという願いは、いつも思うことでありますが、「心の平静」でないと、なかなか難しいことでもあります。その意味でも、「和顔愛語」、「先意承問」の心は大切であり、仏教共通の心だと思っています。

夢違観音の生まれた時代は、青龍・白虎とも関連します。

夢違観音の仏像製作時期の白鳳時代は、法隆寺金堂壁画のみならず、酒の青龍・白虎が古代日本に現れた高松塚古墳、キトラ古墳の壁画製作と同時代であります。

5. 多くの和歌、漢詩

- ・ いくつかの、お薦めガイドコース

市内のあちこちに、良寛さんの詩歌の石碑を見かけることができます。

一カ所に多く集まっているのが、与板の中心街にほど近い、旧黒川沿いの与板河川緑地のたちばな公園です。良寛詩の歌碑が川沿いに細長く広がる公園内に、十基以上も点在し、良寛詩歌碑公園「いしぶみの里」として知られています。良寛の歌碑は万葉仮名が多いのですが、ここでは、ひとつひとつに对照書き下し文付きの説明板があります。私みたいに万葉仮名を読むのが苦手でも歌を味わいながら散策を楽しめる公園です。

和島にある、道の駅「良寛の里わしま」の、貞心尼との二人の像がある「良寛の里美術館」、そして舟越保武さんの女性像もある菊盛記念美術館をセットにしたコースも、美術ファンには喜ばれるかも、と思っています。(私だけかも知れませんが、)舟越保武さんの数多くある女性像は、貞心尼を彷彿させる、と感じています。

- ・ 和歌、漢詩

さて、良寛さんは 多くの和歌、漢詩を遺していますが、心に残る言葉としていくつか。

(1) 苦しいときは苦しむがよき候。災難に会うときは会うがよき候。

悲しきときは悲しむがよき候。

病む時は病むがよく御座候、死ぬ時は死ぬがよく御座候、

これ病死よりすくわる妙薬にて御座候。

He described that 'If you are sick, it is better to be sick, and if you are dying, it is better to die. This is good medicine by which you can escape from disease and death.'

すべての体験をそのまま、あるがまま、受けとめること。喜びも、悲しみも、ごまかさず、逃げずに。自己納得したり、理想化することもなく、受けとめなさい。

(2) 「焚くほどは風がもてくる落葉かな」

落葉を集めようと、あくせくすることはない。

必要なぶんだけ風が運んでくれるものだ。

ある時、長岡藩の九代のお殿様・牧野忠精が、国上山の近くに来られた際、良寛さんのことを知って立ち寄られ、ぜひ城下の寺の住職になって藩政を支えて欲しいと懇請されたことがあったそうです。

五合庵の粗末な草庵でシンプルライフをおくっていた良寛さんは、この申し出を断られたのですが、その時このお殿様に送ったのが、この句であったということです。

The winds gives me enough fallen to make fire. (John Stevens訳)

まさに、小欲知足の心だと思います。

この句の先行するものとして、隣の信州の、小林一茶(良寛より五歳年下)の「焚くほどは風がくれたる落ち葉かな」というよく似た句があり、良寛によって幾度となく口ずさまれているうちに、いつしか「もてくる」と変化したものだが、趣は異なる、と考える意見もある。

(3) 「散る桜残る桜も散る桜」

今どんなに美しく綺麗に咲いている桜でもいつかは必ず散る。そのことを心得ておくこと。物事にはすべて結果がある。時間を止めることができないなら、どう時間を過ごすのかを考えること。限られた「いのち」の中で、その結果に到るまでを、支えてくれている人々に感謝しつつ、如何に充実したものにし、悔いの残らないようにすることが大事ということ。

Flower petals of cherry blossom are scattering, remaining beautiful several petals,
which become scattering before long .

今まさに命が燃え尽きようとしている時、たとえ命が長らえたところで、それもまた散りゆく命に変わりはない。

桜は咲いた瞬間から、やがて散りゆく運命を背負うのである。

と言い切っているとも、受け取れます。

この良寛和尚の句は、親鸞聖人が慈鎮和尚に得度を願われた時にお詠みになられたと伝えられる歌に通じていると思われます。

「明日ありと思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものかは」

明日があると思いついて入っている気持ちは、いつ散るかもしれない儚い桜のよう。

夜に嵐が吹こうものならもう見ることはできない。

(4) 弟に対する良寛の辞世の句と、サイデンステッカーの名訳

a) 辞世の句

形見とて何か残さむ春は花 夏ほととぎす秋は紅葉ば

「今生の別れに臨んで

親しいあなたに形見を残したいが

何を残したらよいでしょうか

残すとすれば 春は花

夏は山のほととぎすであり

秋はもみじ葉 でしょうか」

(美しい自然そのものこそ私の命として残したいものです)

b) サイデンステッカーの名訳

ストックホルムで行われた川端康成のノーベル文学賞受賞記念講演の中で「美しい日本の私—その序説」において「形見とて何か残さむ春は花 夏ほととぎす秋は紅葉ば」という良寛の辞世の歌が引用されている。

サイデンステッカーの名訳	春日の試訳
What shall be my legacy? The blossoms of spring, The cuckoo in the hills, the leaves of autumn.	What should I leave to you while it would become a memento (remembrance)? If I could be forgiven for leaving something, it may be a cherry blossom in spring, a song of cuckoo in summer, and red leaves in autumn. What beautiful scenes in nature they are. What I want to leave are just those.

この句の良寛直筆の書を安田鞆彦が所蔵していたといわれています。

安田鞆彦は、日本美術院の第二世代の巨匠のひとりで、前田青邨、小林古径とともに新古典主義をリードしましたが、良寛風の能書家としても知られています。氏は良寛の書の研究家としても知られ、出雲崎町の良寛の生地、橘屋跡に建設された「良寛堂」を設計しています。線画の美を追求した新古典主義の日本画家らしく、凜とした美しさが漂う、良寛さんにふさわしいお堂だと感じます。

(5) 春夏秋冬

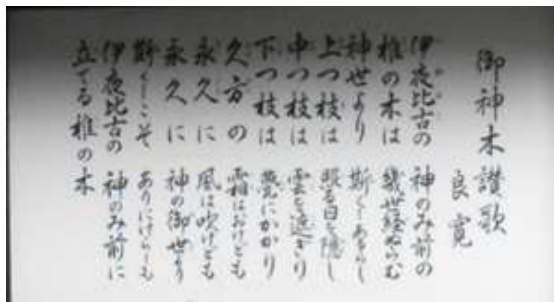
良寛には歌一つに多くの類歌のあるなかで、以下を引用しました。

春	この里に手まりつきつつ子供らと あそぶ春日は暮れずともよし
夏	あしびきの山田の田居に鳴くかはづ 声のはるけきこのゆふべかも
秋	秋の日に光りかがやく薄(すすき)の穂 これの高屋に登りて見れば
冬	今よりはつぎて白雪積もるらし 道踏みらわけて誰か訪ふべき

(6) 弥彦神社の 御神木讃歌 良寛

明快なことばとリズムで綴られており、いつもの良寛でないような歌に感じますが、如何でしょうか。 作成時期の違いかも知れません。

伊夜比古の 神のみ前の 椎の木は 幾世経ぬらむ
 神世より 斯くしあるらし 上(かみ)つ枝(え)は 照る日を隠し
 中つ枝は 雲を遮り 下(しも)つ枝は 薨にかかり
 久方の 霜はおけども 永久(とこしえ)に 風は吹けども
 永久(とこしえ)に 神の御世(みよ)より 斯くしこそ ありにけらしも
 伊夜比古の 神のみ前に 立てる椎の木



絵馬電にも、良寛歌板碑があるという。

碑面

いやひこ(伊夜比古)にまうでて
 ももつたふ いやひこやまを いやのぼり のぼりてみれば
 たかねには やくもたなびき ふもとはは こだちかみさび
 おちたぎつ みをとさやけし こしぢには やまはあれども
 こしぢには みずはあれども ここをしも うべしみやゐと
 さだめけらしも

良寛書

読み

弥彦に詣でて

百伝ふ 伊夜比古山を いや登り 登りて見れば
 高嶺には 八雲たなびき 麓には 木立神さび
 落ちたぎつ み音さやけし 越路には 山はあれども
 越路には 水はあれども ここをしも うべし宮居と
 定めけらしも

良寛書

6. 良寛と貞心尼

右の像は、良寛の終焉の地、和島の良寛の里美術館の展示室入口にある像。館の内外に更に二つの良寛像を見ることができます。二人は、たびたび会って花鳥風月を愛で、仏を語り、歌を詠みました。



(1) 良寛さんの恋

いついつと待ちにし人は来たりけり
今は相見て何か思はむ

(2) 良寛の最期の句

貞心尼が、死期の迫ってきた良寛のもとに駆けつけると、良寛さんは辛い体を起こして貞心尼の手をとり

いついつと まちにし人は きたりけり いまはあいみて 何か思わん (良寛)
そして良寛は、貞心尼に看取られ亡くなりました。貞心尼は、良寛の死の間際に
いきしにのさかひはなれてすむ身にも さらぬわかれのあるぞかなしき (貞心)
(そんなことを言って下さいますな、あなたとの別れはつらいです。)

良寛は彼女の愛に、心からの感謝をこめて御かへしの句

裏をみせおもてをみせて散るもみち (良寛)

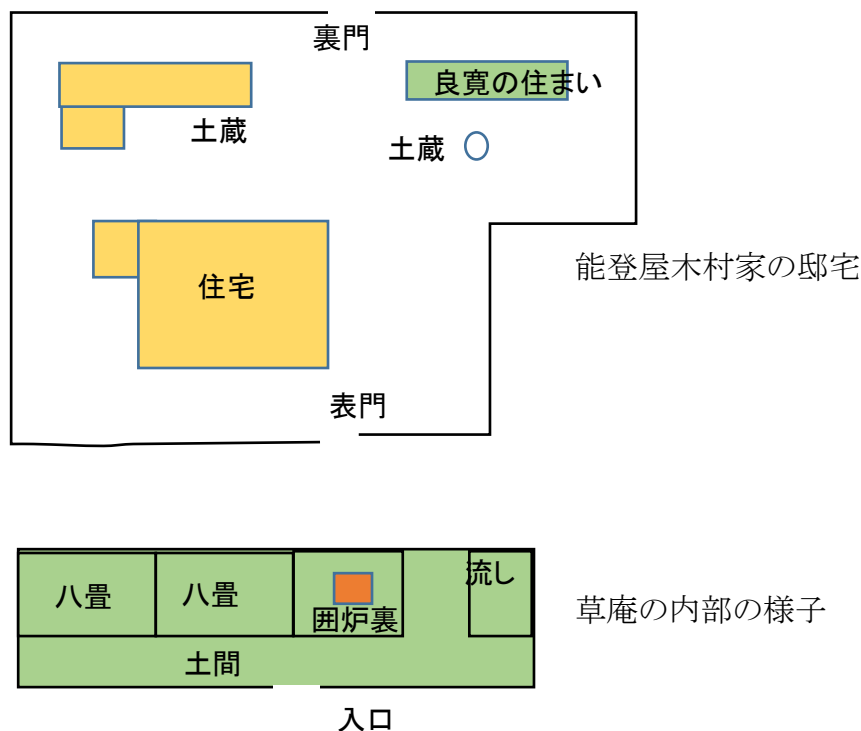
「今までのつき合いで、あなたには自分の悪い面も良い面も全てさらけ出してあなたと向き合ってきました。あなたはそれを全て受け止めてくれました。これ以上、もうあなたに告げるものは何ありません。そんなあなたに看取られながら旅立つことができます」という死期を覚った良寛の、貞心尼に対する深い愛情と感謝の念。

財団法人・仏教協会の名訳	春日の試訳
Showing front, showing back. Maple leaves fall.	I have been face to face with you in the relationship up to now, revealing my true self to you all the both good and wrong temperament. And you have took them entirely. I have nothing to tell you any more. I can close my life while you are warmly watching me.

良寛の死後、貞心尼は良寛の旅した跡を追い、良寛の遺した歌を集めて「はちすの露」という良寛の歌集を自ら編み、生涯肌身離さず持っていたそうです。

(3) 木村家草庵とは

良寛を迎えるにあたり、木村家では「別邸を建てる」という計画もあったようですが、良寛は固辞します。そして、炭置き場兼さく男らの作業場であった小屋を改造してもらい、木村家に衣食住の世話をいただきながら住んだとのこと。この期間も、周辺を托鉢にでかけ、ときには寺泊密蔵院に仮寓したりしたようです。下記に吉岡氏の「島崎における良寛」にあった草案の図をメモします。



ここで、良寛さんと貞心尼さんは出会い、仏門社業、詩歌の道について語らいました。最初の出会いは良寛さん70歳、貞心尼さん29歳。良寛さんの亡くなる半年間は体調を崩した師を看病したと云われています。当時、長岡福島の閻魔等に住んでいた貞心尼さんは、和島まで、難所の塩入峠を越えて、七里の道を通ったようです。閻魔堂から蔵王、そして船で与板か、あるいは閻魔堂から中条にでて与板か。

(4) 貞心尼の歌

貞心尼(1798- 1872年3月19日)

江戸時代後期の曹洞宗の尼僧。良寛の弟子。

歌人。俗名は奥村ます。法名は孝室貞心比丘尼

くるに似て かへるににたり おきつ波
立居は風の ふくにまかせて

孝室貞心比丘墳
乾堂孝順比丘尼
謙外智讓比丘尼

くるに似て かへるに似たり 沖つ波 立居は風の 吹くにまかせて
意味・・・人の運命は、寄せて来ると思えば戻る波のようなものである。
喜びがあれば憂いもあり、成功もすれば失敗もする。
だから、努力した結果は幸も不幸も風の吹くまま運命にまかせよう。

・洞雲寺境内貞心尼墓碑・辞世の歌 （洞雲寺は45才で得度した寺）
<https://ryoukan.anjintei.jp/r-1520510-3011.html>
柏崎市常盤台 洞雲寺境内貞心尼墓碑・辞世の歌
良寛・貞心尼唱和の歌碑「恋学門妨」の右にある 墓域への門から
案内標識に従って進むとある

<墓碑銘は右から>

くるに似て かへるににたり おきつ波
立居は風の 吹くにまかせて
孝室貞心比丘尼墳
乾堂孝順比丘尼
謙外智讓比丘尼

<注>

良寛禅師の病気看病の際 貞心尼が「くるに似てかえるに似たりおきつ波」と
歌いかけたところ 良寛禅師が「あきらかりけり君がことのは」と下の句をつけた。
貞心尼はこの下の句を「立居は風の吹くにまかせて」と置きかえて辞世としたもの。
柏崎市常盤台5-1 洞雲寺建 立明治5年(1872)建立者墓碑銘左に
刻まれた貞心尼の弟子尼僧2名
参 考「いしぶみ良寛」正-73-256_259
良寛禅師が「あきらかりけり君が言の葉」は、「おっしゃる通り、明らかです」の意。

・相馬御風は、次のように述べている。 (Wiki)

それにしても貞心尼が何故自分の剃髪之地として特に柏崎を選んだかというに、それにはこうした因縁がある。それは彼女がまだ長岡の生家に愛育されていた頃のことであった。彼女の家の隣家に柏崎の佐藤彦六というものの娘が女中奉公をしていた。その女は少女時代の貞心を殊の外かあい[31]がって、時々柏崎の話をして聞かせた。わけでも長岡では見ることの出来ない海についてのいろいろの話が、少女の好奇心をそそらずにはいなかった。そして彼女の十二歳の時、ついにその海に対するあこがれに駆られて、彼女は隣家の女中に連れられて柏崎へと海を見に出かけた。初めて見た海の光景は、彼女にとりてはたしかに一種の驚異であつた。就中柏崎郊外の中濱というところにあつた薬師堂附近の明媚な風光が、兎角物に感じ易かつた彼女の心に消し難い印象をのこした。「いつまでもいつまでもこんなところにいたいものだ」というようなその土地に対する愛着が其の場合彼女の胸に湧き起つたのであつた。こんなわけで、後年彼女が人生の無常を感じて出家遁世の志を抱くようになった際にも、先ず第一に彼女の心に描き出された隠棲の地はその柏崎郊外の薬師堂であつた。

—相馬御風、「良寛に愛された尼貞心」『貞心と千代と蓮月』1930, p. 21

貞心尼は字も能く書き、歌も能く詠み、文章も能く書いた。良寛和尚に遇った最初から歌の贈答をしているところから見ると、娘時代から相当に教養を与えられていたのであろう。とにかく娘時代から貞心尼がすぐれた才女であつたであろうことは想像出来る。そして又かなり勝気な性質の女であつたろうことも窺われる。

—相馬御風、「貞心尼雑考」『貞心と千代と蓮月』1930, p. 63

・辞世の歌 補足 ～貞心尼が22年間を過ごした庵の跡

嘉永4年(1851年。貞心尼が54歳のとき)4月、10年間住んだ釈迦堂が類焼したため、外護者の山田静里らが中心となり、広小路真光寺の側に8畳・4畳・3畳の庵室が建てられました。

「不求庵」と名付けられたこの庵に、貞心尼は弟子の孝順尼(19歳)とともに、9月中旬頃に移り住みました。

不求庵では、時々、山田静里らの風流人が集まって歌会が行われ、平和な日々を送ったようです。

安政6年(1859年。貞心尼が62歳のとき)5月14日、長岡市荒屋敷町の高野治郎兵衛の娘で、常福寺広寛禅師の実家の生まれの智讓尼が8歳で

弟子となりました。同年12月8日、剃度師であつた泰禅和尚が示寂されました。貞心尼は没すまでの22年間、不求庵で過ごし、1872年2月11日の午前2時過ぎ、静かに75歳の生涯に幕を降ろしました。

病の床についてから死期の近づいたのを知ったのか、
「玉きはる 今はとなれば みだ仏といふより 外に言の葉もなし」
「あとは人 先は仏に任せおく おのが心の うちは極楽」
などと詠んでいます。

7. ハナの笑った日

洪水の惨禍にたびたび襲われた、当時の越後の哀しい現実

ハナは、数えで入っつ。いつも兄妹の子守りをさせられているので遊ぶことができず、皆が良寛様と遼ぶのを速くで見ているだけだった。でも今日は良寛様を1人じめ。毯つきやあや取りと夕方手先の見えなくなるまで遊んでもらった。

良寛様は知っていた。明日ハナが売られてゆく事を。先日、母親の千代が涙ながらに語った。去年の大水で田畑は流され、その漂着物を片づけに出ていた亭主の茂七は、足の傷から入った泥の毒で今だに寝たり起きたり生活。やむをえずハナを売る事になったと。すでにこの村でも二人の子供が売られていった。

良寛様は今まで何十人もの子供が同じ運命をたどっていくのを見てきた。しかし、自分は何にもしてやる事ができない。せめて、できる事といったら悲惨な運命が待っているこの子供達に一つときでもいいから楽しく過ごさせてやる事。その後、良寛様の毯つきが始まったのである。

翌朝、夜が明けないうちに人買いの九助どんに連れられ、村を出てゆくハナの姿があった。

暗がりの中でその影が見えなくなっても、手を合わせて動こうとしない母親の事などハナは知らなかった。

これから待っている過酷な生活を考えるには、ハナは幼すぎた。

“白いマンマが食える” 九助どんの言葉を信じて連いて行くのだった。小走りに歩いてゆく、その袖の中には、良寛様からもらった鞠が大功にしまわれていた。

※群馬等の宿場町には、女郎塚といわれる墓がある。それは墓というには、あまりにもお粗末で、土葬にされる女郎達が次の埋葬の時、重なる事のないようにとの日印でしかない。

名前と年令、出身地だけ、自然石に彫ってあり、それを見ると、ほとんどが越後の出身者で、年令は二十才まで生きた者はいない。

山本桃楓さん 筆



良寛と手毬にある子供は、
少女が多いという。

新潟市中央区西大畑
「良寛さん 遊ぼ」

8. 隆泉寺と西楽寺

- (1) 隆泉寺と木村家 ～隆泉寺は長岡市和島、浄土真宗本願寺派の寺院
 良寛の墓石は、もともと木村家の墓地にあったが、そこに隆泉寺が移ってきた。
 隆泉寺は 450年前、一向一揆で信長に敗れ、石川・珠洲市より出雲崎・尼瀬
 に来た。その後、木村家(屋号・能登屋)に呼ばれて、島崎・寺町に移ったが、
 戊辰の役で焼失。
 木村家ほか、有力四家が土地を寄進し、現在地に移転した。
 木村家も戊辰の役で焼失したが、土蔵は残り、良寛資料は消失を免れた。

上杉謙信は浄土真宗を禁制、景勝の時代になり、禁制が解かれ、
 県内には、そのときに北陸三県、長野から移った寺が多い。
 石川にあった隆泉寺は、蓮如上人の布教活動で、禅宗から浄土真宗に変わり、
 龍泉寺から隆泉寺に名を変更しそのあと、越後に来たとされる

(2) 木村家の良寛の墓石

良寛が木村家に来た縁については、9. の「弟子の遍澄」の章に述べる。
 良寛の墓石は、寺泊の七つ岩からきた一枚岩。
 向かって左に由之の墓。 右に木村家の墓。
 「俱舎」の墓石のとなりに良寛筆の「南無阿弥陀仏」の碑。

中央に大きく「良寛禅師墓」

左の碑文 施道歌、やまたづの・・・

由之が選定したとのこと。

右の碑文 鈴木文台によって選ばれた五言漢詩、僧伽(そうぎゃ)の詩、
 僧に対する、きびしい言葉。僧伽は、saṃghaの音写。集団・会合の意で、
 仏道修行をする僧の集団。広く在家を含めた集団をいうこともある。

(3) 西楽寺 ～長岡市千代栄町、浄土真宗本願寺派の寺院

450年前、一向一揆で信長に敗れ、石川・小牧より越後に来る。
 高田・浄興寺の宗門拡大の役を負って長岡へ。 隆泉寺 と縁戚関係。

西楽寺と良寛の縁

良寛の島崎在住時代、隆泉寺十三代住職円融の後継ぎとして、
 西楽寺十代住職景巖の弟円海が入寺。さらにその弟導応は、
 やはり良寛ゆかりの分水町願成寺に前後三代入寺。

(4) 西楽寺本堂前にある良寛旋頭歌碑

木村家の良寛の墓石の施道歌と同じ。

「也萬當都能 無可悲乃遠閑耳 散遠志閑轉堂理
可美那川幾 之久礼能安女爾 奴連川々 當天里」

書き下し文

「山たづの 向ひの岡に さを鹿立てり 神無月
時雨の雨に 濡れつつ立てり」

詳細

碑 面

也萬當都能 無可悲乃遠閑耳 散遠志閑堂轉理
可美奈川幾 之久礼能安女爾 奴連川々 當天里
良寛書

読 み

山たづの 向ひの岡に さを鹿立てり
神無月 時雨の雨に 濡れつつ立てり
良寛書

碑 陰

母小さく佇(た)つ秋風の信濃川 秀子
発願 住 職 春日浩三
書施 埵 玉 野口修作
建碑 東 京 恩田倫二
秀子
施工 松木造園 松木賢風
刻字 諸橋泰夫
昭和五十九年十一月一日
坊 守 喆子拝書

場所 新潟県長岡市千代栄町11 (浄土真宗本願寺派)西楽寺境内庭
筆者は良寛(西楽寺所蔵)

碑陰 西楽寺坊守 春日喆子建

碑 昭和59年(1984)11月1日 建碑者恩田倫二・秀子

碑の由来

昭和59年、東京在住の恩田倫二。秀子ご夫妻が、長岡出身の御母堂の
孝養の一念から、郷里長岡と檀那寺西楽寺に寄せられた篤信のお心を、
良寛歌碑建立によって実現して下さいました。(住職啓白より)

9. 良寛の法統

(1) 遍澄とは、どんな人か

遍澄(1801-1876) 良寛より43歳年下、良寛の法弟。

享和2年(1802) 三島和島村島崎(現長岡市)の鍛冶屋甚五衛門の長男に生まれた、読書好きだった少年時代の良寛によく似ていたのも、まわりの人々から「鍛冶屋良寛」と呼ばれるようになった。

15歳の時、良寛を尋ねて弟子入りを請いて許され、以後、師と共に五合庵に住むようになった。

その翌年、良寛59歳、遍澄16歳の時、二人は老朽化が進んできた五合庵を出て、麓に近い乙子神社の社務所に移った。そこは五合庵よりも広く、八畳の部屋を良寛が使い、二畳の小部屋を遍澄が使った。遍澄は常住していたわけではなく、必要な時に来て用を足していたと思われる。

それから10年間、二人は充実した日々を過ごした。心身ともに余裕のできた良寛は、そのすぐれた才能を思う存分発揮し、いわゆる「良寛芸術の円熟期」を迎えた。

文政9年(1826)、26歳になった遍澄は、地蔵堂村の大庄屋・富取武左衛門の強い懇請によって、同村の願王閣の閣主として招かれた。老齢で体も弱ってきた師をひとり山中の草庵に残しておくことはできないと考えた遍澄は、自分の生まれ故郷の島崎村の富豪・木村元右衛門に頼み、師を引き取ってもらった。

5年後の天保2年(1831)1月、良寛の危篤を聞いて木村家に駆けつけた遍澄は、貞心尼、木村家の人々、由之(良寛の弟)などと共に良寛の看護にあたった。良寛は最愛の弟子・遍澄の膝を枕に大往生をとげたと言われている。師の死後、遍澄は願王閣の閣主をつとめるとともに、至誠庵という塾を開いて付近の子弟の教育にあたった。また、亡くなった師の遺した詩歌の蒐集や整理に努めた。

46歳の時に眼病にかかり、55歳で完全に失明したため、やむなく島崎村に帰り、菩提寺の妙徳寺で勤行生活を送った。明治9年(1876)76歳で死去。

遍澄は、良寛に劣らず性格が温厚で純真で、詩歌や書をよくしたほかに、絵の才能にも恵まれ、良寛の肖像画を4点遺している。

上記は、杉本武之氏の情報を参考にしました。

<http://www.akai-shinbunten.net/Main/chita/backnumber/jiai/jiai241.html>

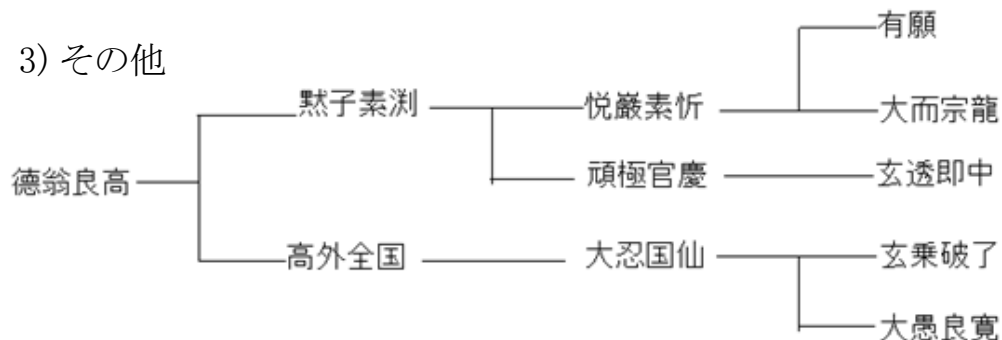
(2) 良寛の法統系図

1) 玄乗破了 光照寺住職 良寛を剃髪

2) 大忍国仙(1723-1791) 円通寺10世

禪門師家としての面目を誇示すると共に、寺格を最高の常恒会地に昇し、又伽藍の再興など寺門興隆の基盤を確立した。

3) その他



徳翁良高 開山1世 元禄11年(1698)補陀洛山円通庵を開創。

玄透即中(1727-1807) 円通寺11世

剛毅果斷、学徳兼備、の誉れ高く、幕府の進言により、永平寺50世を拝命、宗門屈指の傑僧であり、その名声は、宗史に歴然としている。

有願(うがん・1738-1808)

有願は今の三条市代官島の庄屋、田沢家に生まれた。出家して禅僧となり、托鉢(たくはつ)をしながら全国を渡り歩いた。燕市・万能寺の6代目住職である。多作で現存する作品が多い反面、謎も多い。

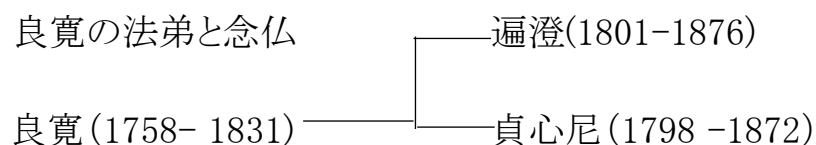
風狂の禅僧とも呼ばれるほど、奇抜なパフォーマンスでも知られるが、良寛は有願と親交を深めた。早く父を亡くした良寛は、父より3つ年下の有願に父の姿を重ねたとも見られる。有願は禅僧の修行として書画を学んだ。

その絵の師となったのが幕府表絵師の玉元。

玉元は、鈴木牧之(1770-1842)にも画を教えた。

<http://www.kenoh.com/2010/08/12ryokan.html>

(3) 良寛の法弟と念仏



晩年に近づくにしたがい、阿弥陀仏に救いを求める歌を多く作っています。良寛は、貧しい農民が真に救われるためには、菩提薩埵四摂法の菩薩行だけでは無理と考えて、ひたすら南無阿弥陀仏と唱え、他力本願的な魂の救済に傾倒していった可能性もあります。また、老境になるにつれ、良寛自身が、それまでの厳しい一人の生活から他人の世話で生きることとなり、阿弥陀仏の本願に一切の身を任せる気持ちになったのかも知れません。そして、そのような生活のなかで出会った貞心尼こそ、お念仏の世界に誘ってくれた人だったのではないかとさえ、思うのです。

補足 漢詩の斜め読み

(漢詩1) 生涯懶立身

しょうがいみをたつるにものうく (しょうがいりっしんをおこたり、らんりっしん)

清貧の生涯を物語るうたとして、知られています。

(書き下し)

「生涯懶立身	生涯 身を立つるに懶(ものう)く
騰々任天真	騰々(とうとう)天真に任す
囊中三升米	囊中(のうちゅう)三升の米
炉辺一束薪	炉辺(ろへん)一束の薪(たきぎ)
誰問迷悟跡	誰か問わん 迷悟(めいご)の跡(あと)
何知名利塵	何ぞ知らん 名利(みょうり)の塵(ちり)
夜雨草庵裡	夜雨 草庵の裡(うち)
双脚等閑伸」	双脚(そうきやく) 等閑(とうかん)に伸ばす

(訳)

私は一生、身を立てようという気にはなれず
 ふらりふらりと天然ありのままの生きかただ
 頭陀袋には米が三升
 炉ばたには薪が一束
 悟りだの迷いだの、そんな痕跡なぞどうでもいい
 名声だの利益だの、そんな塵芥なぞ我れ関せずだ
 雨ふる夜に苦のいおりのなかで
 両の足をのんびりと伸ばす

補足（漢詩2）寛政甲子夏、（漢詩3）僧伽 の全文

（漢詩2）寛政甲子夏 災難に逢う時節には災難に逢うがよく候

文政11年(1828)11月12日に、後に「三条の大震」と呼ばれる大地震が発生しました。多くの被害が現在の三条市を中心に起こりましたが、近年、栃尾、及び東山山麓が震源とされました。推定マグニチュードは7とされ、当時で死者1400人余り、倒壊した家屋はいます。この時、良寛さんは、71才になっていました。良寛さんは三条の地震の惨状を聞き、心配でたまらず三条まで行き、その被害の悲惨さに強い衝撃を受けて、いくつかの詩歌を残しています。

三条の市にいでて

「長らえん ことや思いし かくばかり 変わりはてぬる 世とは知らずて」
「かにかくに 止まらぬものは 涙なり 人の見る目も 忍ぶばかりに」

また、「寛政甲子夏」として、多くの人に知られている長句を読んでいます。作物の出来が良く、人々が秋の穫入れを待っていたところ、突然に悲劇に見舞われた様子がわかります。

寛政甲子(かつし)の夏

凄凄芒種後 玄雲鬱不披
疾雷振竟夜 暴風終日吹
洪潦襄階除 豊注湮田菑
里無童謡声 路無車馬帰

江流何滔滔 回首失臨沂
凡民無小大 作役日以疲

畛界知焉在 堤塘竟難支
小婦投杼走 老農倚鋤睢
何幣帛不備 何神祇不祈
昊天杳難問 造物聊可疑
孰能乘四載 令此民有依

凄凄(せいせい)たる芒種(ぼうしゆ)の後
玄雲鬱(うつ)として 披(ひら)かず
疾雷(しつらい)竟(ひつきよう) 夜に振ひ
暴風終日吹く

洪潦(こうろう)階除に襄(のぼ)り
豊注 田菑(でんし)を湮(しず)む
里に童謡の声無く 路に車馬の帰く無し

江流 何ぞ滔滔(とうとう)たる
首(こうべ)を回(めぐら)せば 臨沂(りんき)を失す
凡そ民は小大無く
役を作(な)して日に以て疲る

畛界(しんかい) 焉(いづく)に在るを知らず
堤塘 竟(つひ)に支へ難し
小婦 杼(ひ)を投じて走り
老農鋤に倚りて睢(のぞ)む
何れの幣帛(へいはく)か 備へざる

側聴野人話 今年黍稷滋

人工倍居常 寒暖得其時
深耕兮疾耘 晨往夕願之
一朝払地耗 如之何無懼

何れの神祇(しんぎ)か 祈らざる
昊天杳(こうてんよう)として 問ひ難く
造物 聊(いささ)か疑ふべし
孰(たれ)か能く 四載に乗じて
此の民をして 依る有らしむる
側らに野人(やじん)の話すを聴けば
今年は黍稷(しよくしよく)滋(しげ)れり
人工は居常(きよじよう)に倍(ばい)し
寒暖 其の時を得たり
深く耕し 疾く耘(くさぎ)り
晨(あした)に往き 夕べに之を顧みたり
一朝 地を払ひて耗(むな)し
之を如何ぞ 懼(うれ)ひ無からんと

(漢詩3) 僧伽

～ 墓石に刻まれた、当時の仏教徒への痛烈な批判の文。
墓石への文として、良寛の多くの書から、これを選んだのは、良寛歿後に長善館を創立した鈴木文臺(文台)です。十八歳の鈴木文臺に才能を見出し、勉学の道を歩ませた師の『最後のことば』として、これを選んだのは何故か、さらに良寛の周囲にいた大勢の人の中から、撰文者として文臺が選ばれたのは何故か、知りたい方もおられると思います。

・良寛のお墓の「僧伽」選定の見方について

(良寛の終の棲家を世話した木村家の見方)

以下は2015年に団体旅行で木村家を訪問の折りにいただいた、現当主の木村元蔵氏の文『良寛様の御墓に刻された「僧伽の詩」について』から抜粋したものです。周りの人々の総意であったことが理解されると思います。

----- 引用 -----

御基の碑文は、「僧伽」と決まり刻印した。鈴木文臺の選文といわれている。なぜこの詩が選ばれ山本家が採用したのか。それに関する記録や書状がありませんで、以下私見です。

「僧伽の詩」は、良寛様の生き方、思想の根幹である。その内容は、当時の宗門、僧侶を激しく批判攻撃しています。そして、次世代の若者に、王道に生きることを恐れるな、学問にはげみなさい、老いて後悔のないようにと、奮励期待している。

このような良寛様の思想形成は、御師匠様国仙の影響大であり、有名な「偈 良寛庵主に付す」が伝来している。この「偈」は、良寛様の生き方を暗示している。

この御墓の建立に関わった人々は、「僧伽の詩」は良寛様の思想の根幹であり、これを実践されたと認め、師を畏敬していた。

しかし、僧伽の詩で、宗門を厳しく批判攻撃した良寛様の、晩年七十歳をすぎた頃の詩に「草庵雪夜」があり、七十歳過ぎて死を覚悟し、「人間是非飽看破 人間の是非看破に飽く」と言っている。

～このあと、多くの書物に紹介されている、御師匠様国仙の「偈 良寛庵主に付す」とともに、「草庵雪夜」が紹介されています。～

草庵雪夜作

回首七十有余年	首を回らせば七十有余年
人間是非飽看破く	人間の是非 看破に飽く
往来跡幽深夜雪	往来 跡幽かなり 深夜の雪
一炷線香古窓下	一炷の線香 古窓の下

----- 引用 終り -----

「僧伽の詩」

以下は、墓碑「良寛禅師墓」の右側に刻された墓碑銘の案内板の内容です。

僧伽

落髮為僧迦	髪を落として僧迦と為り
乞食聊養素	食を乞うていささか素を養ふ
自見已如此	自ら見るすでに此の如し
如何不省悟	如何か省悟せざらんや
我見出家兒	我れ出家の児を見るに
昼夜浪喚呼	昼夜みだりに喚呼して
祇為口腹故	ただ口腹の故に為す
一生外辺驚	一生外辺を驚(はしる)
白衣無道心	白衣にして道心なきは
猶尚是可恕	猶尚是れ恕すべし
出家無道心	出家にして道心なきは
如之何其汚	之れ其汚(けがれたる)を如何せん
髮斷三界愛	髪は三界の愛を斷ち
衣壞有相色	衣は有相の色を壞(やぶ)る
棄恩入無為	恩を棄てて無為に入る
是非等閑作	是れ等閑の作(しわざ)に非ず
我適彼朝野	我彼の朝野を適(い)くに
士女各有作	士女おのおのなすあり
不織何以衣	織らずんば何(なに)を以てか衣(き)
不耕何以哺	耕さずんば何(なに)を以てか哺(くら)はん
今弥釈氏子	今釈氏の子と称して
無行亦無悟	行も無く亦悟もなし
徒費檀越施	徒らに檀越の施を費して

三業不相顧	三業相顧みず
聚頭打大話	頭をあつめて大語をたたき
因循度旦暮	因循して旦暮をわたる
外面逞殊勝	外面は殊勝を逞しうして
迷他田野嫗	他の田野の嫗(をうな)を迷はす
謂言好箇手	謂ならばわれ好箇手と
吁嗟何日寤	ああ何れの日にか寤(さ)めん
縦入乳虎隊	たとえ乳虎の隊に入るとも
勿踐名利路	名利の路を踐むこと勿れ
名利纔入心	名利わずかに心に入れば
海水亦難澍	海水も亦そそぎ難し

阿爺自度爾	阿爺なんじを度してより
曉夜阿所作	曉夜何のなす所ぞ
焼香請佛神	香を焼いて佛神に請ひ
永願道心固	永く道心の固きを願えり
似爾如今日	なんじが今日の如きに似なば
乃無不抵牾	すなわち抵牾せざるなからんや
三界如客舎	三界は客舎の如く
人命似朝露	人命は朝露に似たり
好時常易失	好時は常に失易く
正法亦難遇	正法亦遇い難し
須著精彩好	須らく精彩をつけて好かるべし
母待換手呼	手を換へて呼ぶを待つこと母(なか)れ
今我苦口説	今我れ苦(ねんごろ)に口説するも
竟非好心作	竟(つひ)に好心の作に非ず
自今熟思量	今より熟(つらつら)思量して
可改汝其度	汝が其度を改む可し
勉哉後世子	勉めよや後世子
莫自遺懼怖	自らく懼怖(くふ)を遺すこと莫(なか)れ

墓碑の左側に刻された良寛旋頭歌「やまたづの」は、弟の由之の撰とのことです。

国上のいほりにいました時
 やまたづの むかひの丘に 小男鹿立てり
 神な月 しくれの雨に ぬれつゝたてり

・良寛の僧伽、現代語訳

落髪して僧伽となり
 食を乞うて聊素を養ふ いささかそをやしなう
 自ら見ることに已に此の如し すでにかくのごとし・・・

髪をおろして僧侶になつたからには
 施しを受け、本来の仏道心を養うべきだ

この厳しさを考えれば
 反省、自覚しないではいられない

ところが、出家したばかりの者は
 昼夜を問わず大声を出して説教をしている
 ただ腹を満たすだけに
 一生、仏道修行以外のことに心を走らせているだけ
 在家の人が修行の心が薄いのは
 未だ許せる
 出家の身で仏道の心が無いのは

その穢れた有様をどうしたらいいのだ
 髪はこの世の愛欲を断ち
 黒い衣は世の物に引かれる間わりを絶ち
 親や夫婦の恩を棄てて仏門に入ったのは
 決していい加減なものではない
 私が世の中を出歩いて見るに
 男も女もするべき仕事を持っている
 もし布を織らなければ着る物がない
 耕す者が居なければ食べるものがない
 今、釈迦の弟子と言っている僧侶は
 仏道を修行もなく、物事のあり方も究めようとしない
 ただ信者の施しを無駄に使い
 仏の三つ(体・言葉・心)の戒めも心に留めず
 大勢集まっては、思い上がった話をしている
 昔どおりの日々を送っている
 うわべは悟りを得た顔つきをして
 人の良い田舎老婦をだましている
 そして我こそはやり手だとうぬぼれている

ああ、いつの日にも目覚めてくれるだろうか
 たとえ子連れの子の群れに入ろうとも
 僧侶は名誉や利益の道に携わってはならない
 名誉や利益の欲心わずかでも生じれば
 海の水すべてを注いでも洗いつくせまい
 お前の親がお前を出家させてからは
 朝夕何をしていたと思うか
 香を焚いて神や仏に祈り
 ずっと仏道への心が警ないことを願っているんだ

それなのに、今のようになれば
 親の心と食い違うではないか

この世は宿屋のように仮の宿だ
人の命は朝露のようにはかない
修行するに良い時期はいつも失いやすく

正しい仏の教えもたやすくは出遇えない
だから進んでする活力を身につけなさい
人々が呼ぶのを待っていてはいけない
今話しているのは
思いつきや、物好きで話すのではない
今からよくよく考えて
お前の心がけを改めなさい
精を出して物事に当たりなさい
おじけ、恐れる気持ちを自ら残してはいけない。

自坊を持たず、一生、厳しい生活の中で過ごしてきた良寛にとって、
世の腐敗している僧侶は、我慢ならなかったと思われる。
やさしい姿の裏に、厳しい僧侶の姿が目には浮かぶ。

参考 良寛と鈴木文臺・漢学塾長善館の関わりのトピックス

(話題_1)

良寛さん

- ・良寛さんが鈴木文臺を見出し、勉学の道を歩ませたと云える。
- 1804年頃 良寛56歳、文臺18歳の頃、文臺は良寛に「この子将来見るべきものあるべし」と才能を認められ、その後も親交を続けた。
- 1826年 良寛、乙子神社草庵から島崎・木村家草庵へ移る。
- 1833年 文臺、栗生津村私塾を創設。
- 1912年に閉鎖されるまでの約80年間、1,000人を超える塾生。
- ・度重なる洪水に続く、三条地震
つらい農村の人々に寄り添う。 寛政甲子夏。
- ・相馬御風
大愚良寛の執筆
高田の東北日報新聞の俳句撰者、同時期に武石貞松が漢詩撰者
早稲田の同期に会津八一
- ・安田靱彦
良寛堂の設計、良寛研究家としても知られる ～ 日本美術院
岡倉天心 別荘「赤倉山荘」

館主の系譜と鈴木虎雄

鈴木文臺(1796年-1870年) 初代館主。 1833年、長善館を開学。

良寛は、18歳の文臺に初見で才能を認め、江戸に勉学を進めた。後も20年間、親交。

鈴木惕軒(てきけん1836年-1896年) 二代館主。 小千谷片貝の小川家に生まれ、
文臺に師事し、師の二女と結婚、長善館を継ぐ。子息に柿園・彦嶽・豹軒。

柿園(しえん 1861年-1887年) 教師。 彦嶽(げんがく 1868年-1919年) 三代館主。

鈴木虎雄(豹軒、1878年-1963年) 1961年、川端康成氏らとともに、文化勲章。

豹軒の漢詩のなかに、「朝暮東西看れども厭わず 蘇門の嶽雪剣峯の青」の句
京都学派の中国学の祖。弟子に小川環樹氏、吉川幸次郎氏ら。

長善館では森鷗外の漢詩の師と云われる師範代、桂湖村に学ぶ。

(長岡関連話題_1)

良寛さん

高僧であり、漢詩・和歌、書にも卓越しながら、無欲恬淡に民と共に生きたマルチ人間。

当時、曹洞宗門で最も厳しい修行道場で印可を受け、処遇されもした、類まれな高僧。

然るに生涯寺に属さず弟子も持たず、貧窮に苦しむ民衆に寄り添った孤僧。多くの書、詩。

相馬御風の著作、「大愚良寛」

安田靱彦設計の、生家跡の「良寛堂」(日本美術院の画家で、良寛研究家)